

《論文》

# 中国におけるカミングアウト支援の現状： 支援機関 Trueself の調査から

劉 強\*

## The Current State of Coming Out Support in China: From a Research by the Support Organization Trueself

Qiang LIU

This study provides an overview of support for “coming out” in sexual minorities in China. Online interviews were conducted with 10 volunteers from the support organization “Trueself.” The results showed that Trueself provides support to sexual minorities and their families through a hybrid support system (online and offline) with a well-developed training system. In China, there is a lack of policy support and protection for minority rights, and improving the environment for sexual minorities is a major challenge. Trueself fills a void in this support. In China, where the family is a priority, the family approach has opened up many possibilities for support. The diversity of support is also thought to be a reason for the development of Trueself. However, the lack of government support in China, the influence of local culture, and the low potential for developing support in rural areas remain challenges for the future.

キーワード：中国、家族、セクシャルマイノリティ、カミングアウト、支援機関

Keywords: China, family, sexual minority, coming out, support organization

### 1. はじめに

本研究は、中国におけるカミングアウトの支援について検討するものである。田中・今城（2021）は、カミングアウトは性的マイノリティについて語るときに欠かせないテーマであると指摘している。森永（2018）によれば、カミングアウトとはもともと「coming out of the closet」（クローゼツ

---

\* 立命館大学大学院人間科学研究科博士課程後期課程

gr0274vr@ed.ritsumei.ac.jp

Received on 2021/11/12, accepted after peer reviews on 2022/7/26.

© 立命館大学アジア・日本研究所

『立命館アジア・日本研究学術年報』2022, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.3, pp.94-108.

トから表に出てくる）という言葉が短縮されたもので、性自認や性的指向を隠している状態から、それを表に出した状態になる＝打ち明ける、という意味を持つ言葉として使われ、社会の中で自身のセクシュアリティをカミングアウトするという行為は、自身のアイデンティティに関わることであり、社会に対する重要な行為のひとつにあたる。そのためカミングアウトは、多様なセクシュアリティが理解されていない環境や、セクシャルマイノリティが偏見や誤解に晒され、抑圧された環境下では非常に困難な行為だと指摘されている。例えば、中国では、生活報（2018）の記事によると、性的指向を理由に幼稚園の教諭が解雇されたという出来事がある。また、河南商報（2016）の記事によると、男性同性愛者が性的嗜好を理由に家族に強引に精神病院へ入院させられるという事例もある。このように、中国社会においてセクシャルマイノリティであるがために社会的な不利益を被る出来事が発生している。このような出来事は、中国社会が同性愛者に対する理解の乏しさを表す一側面であり、カミングアウトを行う障壁をさらに高いものにしてしまうと考えられる。また、中華新聞傳媒網（2017）の報道によると、中国インターネット視聴番組サービス協会が頒布した「インターネット視聴番組内容審査通則」の第8条第6款において、同性愛を近親相姦・変態性欲・レイプと同様に扱い、異常な性関係を表現するものとして指定していた。つまり、中国社会において、セクシャルマイノリティへの理解は進んでおらず、彼/彼女らが不利な状況になる社会において、権利を擁護することはもちろん、彼/彼女らが自分らしく生活を営めるようにカミングアウトをサポートすることは極めて重要な課題である。

加えて中国には他国とは異なる特殊な事情もある。国家政策として、一人っ子政策が長年に渡り実施され、多くの家庭では一人の子しか育てることができない環境であった。また、中国には強く家系の存続を志向する家族主義的な側面もあり、結婚し家系を存続させるための圧力は、その一人の子に強くのしかかることとなる。このように、家族へカミングアウトすることそのものの困難さに加え、家族がカミングアウトを受容することがますます難しくなる環境的要因が中国にはある。

上記のような背景を踏まえ、カミングアウトやそれにまつわる家族への支援が充実していくことが望まれる。北京同志中心（2015）が発表したデータによれば、少なくとも127の支援機関があり、上記の状況に問題意識を持ったセクシャルマイノリティを支援する機関が少なくない数存在している。しかし、そこでどのような支援が提供されるのか、研究はすすめられていない。そのため、本研究では、支援機関ボランティアへのインタビューから、中国におけるカミングアウト支援について概観し、支援の仕組みや課題を検討し、今後の支援の発展の一助となることを目的とする。

## II. 中国におけるカミングアウトの現状

上記で紹介した中国社会では、カミングアウトに躊躇し、自分の性的指向を周囲に明らかにしないことが多い。例えば、景・王・張（2014）は中国は同性愛者向けのポータルサイトにて301名を対象にアンケート調査を行った結果、「カミングアウトをした」と解答した216人のうち、「親にカミングアウトした」と解答した人はわずか7%である。また、Wei・Liu（2019）は、中国のセクシャルマイノリティの学生のカミングアウトについて調査を行った結果、家族へのカミングアウトの少なさを指摘している。このような中国における家族へのカミングアウトの少なさについて、王（2011）は中国の男性同性愛者は自分のアイデンティティを認めつつもカミングアウトは拒絶し、特に親に対するカミングアウトをしない傾向があると指摘している。その理由として、主に内面的に同性愛

を嫌悪していることやステレオタイプなどによる影響が挙げられた。一方、王（2014）は子どもが“クローゼットから出た”のに対し、カミングアウトされる側（親）は“クローゼットに入る”ことが特徴であると指摘している。親は子どもにカミングアウトされた後、受け入れることができず、子どもの性的指向について家族外に隠すことが多い。現在、同性愛者を罰するような法的根拠は中国にはないが、かつて同性愛行為は取締対象であった。その影響で、今日でも同性愛者及びその家族は差別されうる社会的背景がある。また、黄（2019）は、家族や子どもが差別されることへの心配のほか、同性愛者への権利保護の乏しさ、子どもが子どもを作ることができないことによって家系を存続させることができないといったことが、中国の親が子どものカミングアウトを受け入れない理由になっていると指摘している。上記で述べた事柄は、いずれもカミングアウトを困難にする要因の1つであり、家族内でのカミングアウトにも影響を与えていると言える。

砂川（2018）はカミングアウトが人間関係を作り直す作業の始まりで、新しい自分とこれまでお互いをよく知っていた親密な関係の相手との出会い直しであると述べている。つまり、家族へカミングアウトする場合、今までとは違うアイデンティティを持つ自分が親と向き合うことに等しい。そのため、カミングアウトを受ける家族にとってもそれを受け入れることは困難を伴うものとなり、カミングアウトの後に、比較的すぐに受容する家族もあれば、受容されるまでに長い時間を要する、もしくは拒絶したまま事態が進展しないというように、家族によってばらつきがみられる。

一方、中国以外ではカミングアウト支援についての研究が報告されている。例えばアメリカでは、PFLAG（レズビアンとゲイの親と家族と友人をつなぐ会）といった支援機関があり、Broad（2011）は「感情的な約束」という概念でこの機関の活動を解釈していた。つまり、PFLAGの動機付けの枠組みが、悲しみという観点からの参加の呼びかけと、愛という観点からの行動の呼びかけとのバランスを慎重に取っていると指摘している。それによって、潜在的な参加者に、同性愛嫌悪の否定的な感情を乗り越え、自分の子供への愛を回復し、祝福するよう促すのである。また、日本においては、三部（2014）によって関西を拠点とするセルフヘルプグループ虹の会（仮名）が紹介されている。虹の会は、子どもからカミングアウトされた異性愛者のために設立されたグループで、ここでは子ども参加者は自分の親に言えないようなことを親参加者の前で語り、対して親参加者は自分の意見をあたかも自分の子どもに言い聞かせるように子ども参加者に言える雰囲気を作られているという。三部はあたかも親子であるかのような相互行為に焦点を当て、それを「疑似親子」と表し、虹の会が実親子関係を考えるために重要な舞台を参加者に提供したと示唆した。

このように家族関係を変化させるカミングアウトをめぐる、社会的支援が必要とされている。しかし、前述したように、中国におけるカミングアウトをめぐる研究の多くはその困難さ、カミングアウトする・しない理由、また親が子どものカミングアウトを拒絶する理由などにフォーカスされ、その支援をめぐる研究が十分に進んでいないのが現状である。そのため、本研究では、中国におけるカミングアウト支援活動に着目し、支援の仕組み及びその課題を検討していくために、中国にてカミングアウトを中心に支援活動を行う機関の1つである「出色伙伴（以下英語名の“Trueself”と記す）」に調査の協力を要請した。

### III. 支援機関 Trueself の支援について

#### 1. 調査方法

本研究の調査期間は2020年12月から2021年1月までであった。本研究は、オンラインでTrueselfに所属するボランティア10人を対象に行った半構造化インタビュー調査による結果をまとめたものである。オンライン調査にした理由は、調査者と協力者双方の健康状態を考慮し、新型コロナウイルス感染症の感染リスクを回避するため、筆者が中国へ渡航しなかったためである。各協力者の年齢、活動時間、性別及び個人または子どもの性的指向を聞き取った上で、ボランティアに務めるきっかけ、支援活動内容及び支援するにあたって感じた問題点について質問した。協力者概要は表1で示したように、インタビュー対象者のうち、男性同性愛者4人、子どもにカミングアウトされた父親1名、母親5名である。1回あたりのインタビューの時間は1時間から2時間前後であり、基本は1名ずつ実施したが、1組のみ夫婦同時にインタビュー調査を実施した。インタビューに入る前に、インフォームド・コンセントを行い、改めて研究説明を行い、同意書に署名を得た。協力者の過去のトラウマを引き出す危険性が伴うため、協力者に事前にその危険性を説明し、話したくない事は無理に話す必要はないこと、いつでも中止できることも伝えた。

表1 協力者概要

仮名	性別	年齢	活動時間	
A	男性	25	1年	男性同性愛者
B	男性	26	1年	男性同性愛者
C	男性	28	4年	男性同性愛者
D	男性	43	13年	男性同性愛者
E	女性	55	1年	母親ボランティア
F	女性	69	5年	母親ボランティア
G	女性	49	7年	母親ボランティア
H	男性	60	5年	父親ボランティア
I	女性	60	5年	母親ボランティア
J	女性	57	8年	母親ボランティア

さらに、本研究はテーマティック・アナリシス法（以下TAとする）を参考に分析を行った。Boyatzis（1998）が提唱したTAは質的分析手法の1つであり、質的データの中にパターンを見出すための体系的なプロセスである。土屋（2016）は分析の手法の多様性と厳密性がTAの強みであると示唆した。分析の際、インタビューの録音を逐語録として文書化し、筆者が何度も逐語録を熟読した。その後、ソフトウェア「MAXQDA」を用いてコーディングを行った。類似するコードがある程度まとまりを持った時点でコード確定する作業を行った。さらにそのコーディングデータをもとに、表2で示したテーマを生成した。

表2 テーマ

(1) 集団向けの支援
1 : ライブ (n=1)
2 : ホットライン (n=4)
3 : 懇談会及びシェアリング会 (n=9)
4 : 啓発活動 (n=2)
(2) 個人向けの支援
1 : カミングアウトされた親への支援 (n=5)
2 : カミングアウトする本人への援助 (n=3)
(3) 支援の課題
1 : 政策上の制約 (n=3)
2 : 地域間の支援の格差 (n=2)

## 2. 支援機関 Trueself の概要

分析の前に、支援機関 Trueself を紹介する。支援機関 Trueself は 2008 年に発足した。本部を中国の広州市に置き、全国規模の機関であるため、全国 70 以上の都市にボランティアチームを有し、2018 年では、ボランティア登録者数は 5000 人を超えた。また、ボランティアは主にセクシャルマイノリティ、セクシャルマイノリティの子どもを持つ親（以下、親ボランティアと呼ぶ）からなっている。ボランティアの中には、普段は別の本業に従事しながら、その他の時間を使い活動を行う者や、定年退職後、1つのキャリアとしてボランティア活動に身を投じる者もいる。また、Trueself の活動経費はほとんど有志の寄付により賄われている。国から支援がない中でも、当事者たちは自身の力で機関の影響力を高め、現在では国内で最大のセクシャルマイノリティの支援機関にまで拡大している。セクシャルマイノリティの権利の保護とともに、カミングアウトをめぐる支援も求められている中国社会において、この機関は重要な役割を果たしている。

組織が拡大していった背景には、ボランティア研修制度が整備されていることが1つの要因として考えられる。制度の概要は、親ボランティアの場合、まず初級の「レインボークラス」での研修を終え、その後、上級の「レインボー協力営」の研修を受ける。研修を通じて、セクシャルマイノリティについての知識を得ることができ、同性愛者社会運動の歴史、公共関係学の学習、募金活動の取り組み方や対人援助場面におけるコミュニケーションの方法や対人援助技術などを学ぶことができる。

## 3. 支援内容及び問題点

Trueself では、支援活動を概ね集団向けのものと個人にフォーカスするものの2パターンに分けている。支援の手法はオンライン、オフラインとのハイブリット式に取り組んでいる。オンライン支援とは、SNS を駆使した支援、ライブ配信、またホットラインなどの方法で行う支援のことを指す。イベント情報を SNS を用いて拡散し、参加者を募集している。機関の公式アカウントがイベントに関する情報を発信する場合もあれば、ボランティアが自身のアカウントで情報を拡散する場合もある。普段生活の中で人々がよく使うチャットアプリやセクシャルマイノリティのみが使うアプリで情報を拡散している。さらに支援を希望する人に個別連絡先を追加してもらい、チャットグループに招待している。その後、チャットアプリを通じて遠隔支援を行い、必要に応じてオンライン支

援からオフライン支援に切り替える。オフライン支援の場合、全国規模の懇談会や地域規模のシェアリング会、山登りなどのアウトドア、レインボーツアー、また、インドアなものでは読書会、映画鑑賞会など豊富なイベント活動がある。数多く開催されるイベントを通じてコミュニティを形成し、凝集性を高めている。また、相談者の要望により、その家族の実際の生活の場に仲介者として入り、家族間で起きるカミングアウトをめぐる諸問題に対して自身の経験を活かした支援を届けている。その他、他機関と連携を取り、セクシャルマイノリティの権利保護活動も行っている。実際の支援では、相談者の話に共感を持って傾聴することを基本としつつ、同時にセクシャルマイノリティに関する基本知識の付与も行う。また、ボランティアはセクシャルマイノリティとセクシャルマイノリティの子どもを持つ親であるため、自身の経験を活かし、自分の体験を積極的に開示している。このことは、支援者と被支援者の間に共通の経験があることを認識させ、支援を進めるにあたって大きな役割を果たしている。また、共通体験を持つ人が集まる場所で、体験を語り合うことによって情報共有がなされている。そして、各種の企画やイベントは、セクシャルマイノリティ及び彼/彼女らの親からなるコミュニティの形成に貢献している。その支援の詳細を下記で紹介する。

#### (1) 集団向けの支援

Trueselfでの支援活動は集団向けのものが多数行われている。本研究では典型的な活動を4つ紹介する。それは、1) ライブ配信、2) ホットライン、3) 懇談会及びシェアリング会、4) 啓発活動、である。

##### (a) ライブ配信 (n = 1)

事前にポスターを作成し、ボランティアが情報拡散を行う。初期の段階では、週1回のペースでライブ配信を行っていたが、その後、ボランティアの人数が増えることでライブ配信の回数も増えた。ボランティアが決められた時間帯にセクシャルマイノリティが使用するアプリをはじめとするライブ配信アプリを駆使して行うライブ配信では、自身の経験を話したり、視聴者の質問に答えるといった形式で進められ、場合によっては、1万人弱の視聴者が集まり、アーカイブ視聴は10数万回に上ることもある。その進行に関する語りは以下のものである。

*F: ライブ配信の時、自分の経験上の話をしていました。どのようにカミングアウトすれば良いのか、どのように親と交渉すべきかを話していました。質問する人がいればまたそれに答えます。*

ライブ配信の際には個別に話を聞くことが難しいため、相談を希望する視聴者には個別連絡先を追加するよう誘導し、配信の後に個別支援を提供する。また、ライブ配信とは別に、母の日や父の日などのような時期に、特別オンライン講演会を開催し、参加希望者をチャットアプリのグループチャットルームに招待し、ボランティアを務める親たちが自身の体験を共有する。

##### (b) ホットライン (n = 4)

ホットライン受付時間は毎日午後8時半から10時半までである。1人当たりの相談時間はおよそ30分前後である。期間中は1人のボランティアが待機し、担当は事前に決められている。担当者は日々の相談記録を作成し、担当者間で情報共有を常に行っている。相談者の多くはセクシャルマイ

ノリティやセクシャルマイノリティを持つ親である。この支援の方法に関して、男性同性愛者のCさんは次のように語った。

Cさん：ホットラインは全国向けのもので、「若者ボランティア伴走プログラム」と「親ボランティア伴走プログラム」との2つのプログラムがありましたが、今は「若者ボランティア伴走プログラム」の活動は停止となり、「親ボランティア伴走プログラム」のみ継続されています。その理由は、相談希望者の多くが親ボランティアとの交流を期待していたためです。現在は親ボランティアが電話受付を行っていますが、必要に応じて若者ボランティアを希望者に紹介することもあります。

Cさんが語ったように、ホットラインの相談者は親ボランティアとの交流を期待している。ここでは、ボランティアが行う支援は、主に傾聴すること、共感すること、また長期支援に繋げるために尽力することである。子どもにカミングアウトされ、周囲に同じ経験を持つ人がいない親にとって、ホットラインを通じた自分と同じ経験を持つ人との出会いは貴重であり、社会的資源と言える。また、限られた時間の中での「傾聴」、「共感」、「次に繋ぐ」の3つのステップは、相談者に今後継続的に支援を提供することにつながる。

(c) 懇談会及びシェアリング会 (n = 9)

懇談会は規模が大きく、参加者は1000人に上る場合もある。貸し会場で行うほか、フェリーで行う場合もある。フェリーの場合、往復の乗船時間にイベントを開催し、到着後は現地を観光する。フェリーのため、事故防止やトラブル回避の観点から、セクシャルマイノリティが家族を伴う場合、カミングアウトしたことが原則とされているが、カミングアウトせずに参加するケースも見られた。その場合、多くの親が最初は拒否したが、ボランティアが積極的に働きかけ、必要な支援を行ったため、旅の終わりで受け入れた家族も多い。懇談会では、互いに自分の経験を話し合うことが大きなテーマである。例えば、Dさんは懇談会の進行についてこのように語った。

Dさん：私たちは通常、受け入れた親に自分の体験をシェアしてもらいます。もちろん、子どものセクシャルリティをまだ受け入れられていない親が自分の経験をシェアしてくれるのも大歓迎です。とりあえず、情報をこの空間で流してもらおうのです。

Fさんも懇談会の内容について言及していた。

Fさん：たいてい、子どものカミングアウトを受け入れたプロセスをみんなで共有します。

この場合、参加者同士で自己開示しあい、互いに自分の経験を語り合うことで情報共有ができ、支援にとって非常に重要な一環となる。

シェアリング会の話題提供者は子どものカミングアウトを受け入れた親やボランティアである。懇談会の内容と類似するが、各地域で開催され、規模は30人から200人の間である。活動内容は以下のようなものである。

Iさん：私たち夫婦も登壇したことがあります。自分がどのように子供のカミングアウトを受け入れたのかを語りました。他の参加者からも質問があって、例えば、子供のカミングアウトを受け入れた後の生活はどのように変化したのか、どのように他人の目線と付き合っているのか、などでした。それに答えたりしました。

懇談会、シェアリング会のほか、時には、友人作りワークショップ、母親ワークショップ、ゲイワークショップ、レズビアンワークショップなど多様なワークショップが開催され、相談したいことによって好みのワークショップに参加することが可能である。また、地域独自で企画するイベントも多数ある。

#### (d) 啓発活動 (n = 2)

ボランティアの中には、積極的にテレビ番組や新聞取材などに協力し、公の場で自分の経験を語り、セクシャルマイノリティの注目度を高める人がいる。

Jさん：私はたくさんの新聞社やテレビ局の取材に協力したことがあります。(中略) ある地元のテレビ局では、私ともう一人の親ボランティアのインタビューが放送されました。(中略) 私の家で、子どもとの生活場面でテレビ局のインタビューに応じたこともあります。(中略) 地元のテレビ局なので、同僚も見たはずですし、私はその情報を自分のSNSでシェアしたこともありますので、知人も見たはずです。

このように、Jさんは新聞やテレビ番組の取材を通して、セクシャルマイノリティの母親としての経験を語り、周囲に多様な性の存在を発信してきた。また、SNSで2万人近くのリフォロワーを有するAさんは積極的に同性婚の合法化について発信している。

Aさん：私は自分のSNSでも、民法典の改正案に関して、同性婚の合法化を呼びかけました。皆さんに積極的に自分の声を上げて国に届けてほしいと思っていました。

こうして、ボランティアは自分が声を上げることができる場所で情報を発信し、セクシャルマイノリティへの注目を呼びかけている。そのほか、Trueselfは講演会を開催し、多様な性の存在、法律や政策などの知識を提供する活動を行っている。研究者への研究支援も行い、学生のフィールドワークやインターンシップにも協力している。

#### (2) 個人向けの支援

Trueselfの活動において、広く一般向けのものもあれば、個別に家庭への介入も行われている。その場合もオフラインとオンラインの両方で展開し、さらにカミングアウトに直面する親子それぞれに支援を提供している。この節ではその具体的な活動を紹介する。

##### (a) カミングアウトされた親への支援 (n = 5)

ここでカミングアウトされた親への個別支援を紹介する。ホットラインの場合、親の相談の多く

は自分の体験を話すことである。この場合のJさんは次のように対応した。

Jさん: そのお母さんは息子を尾行して、そして、息子がもう一人の男性と一緒にホテルから出るのがロビーで目撃しました。(中略) とりあえず話を聞いてあげて、そして慰めてあげました。私と同じく息子を受け入れるようにも説得しましたよ。また、たくさん同じ体験をもつ親のチャットグループに参加することもすすめました。うん、やはり話を聞くことがメインでしたね。

また、Eさんはこのように対応した。

Eさん: このような親の場合、一回だけで話を完全に聞くのは難しいから、さらに時間を設けてじっくり話すことを勧めます。話してくれるのが嫌じゃなければもちろん個別で。(中略) また、親のチャットグループに参加するように誘導します。そのグループには400人ぐらいの親がいます。やはりこのような人ってさ、寂しいし、悲しいから、同じような経験を持つ人と話して、心を開いてもらうこともできるんです。

ホットラインでは、それぞれの相談者に割り当てられた時間は限られているため、ボランティアはまず相談者の話を傾聴し、その後、個別に連絡が取れるよう連絡先を追加するよう促す。その後のフォローはSNSを通じて行われ、チャットアプリを活用し、グループチャット、個別チャットや電話を通じて、セクシャルマイノリティとその親に遠隔支援を行う。チャットグループでは毎日午前8時から12時まで、午後2時から6時まで、7時半から10時までの3つの時間帯ごとに、それぞれ当番のボランティアが事前に決められている。Iさんの場合、チャットグループに参加した親に対して以下のように支援を行っている。

Iさん: まずは新規参加のメンバーに歓迎の意思を伝えます。皆さんの反応はそれぞれです。無口だったり、悩みを相談したり、また悪口を言う人もいます。私たちは全ての人の意見を尊重して、自由に発言できる場を作っています。必要に応じて、自分の経験を開示しながら、寄り添ってあげます。拒まれなければ、必要な資料を送り、知識も伝えています。

また、相談者の希望に応じて個別に連絡を取る。特に、セクシャルマイノリティの相談の場合、必要に応じて本人の代わりに家族に直接働きかけることもある。例えば、Fさんの場合、家族にカミングアウトを受け入れてもらえなかったある男性同性愛者の希望で、その人の母親と直接連絡を取ることがある。男性の母親は性的指向を治療可能なものと認識し、Fさんと一緒に治す方法を探ろうとしていた。このような事例に対し、Fさんは次のように対応した。

Fさん: 彼女は、あなたの子どももそうなの?と聞いてきました。そして、私たちが子どもを放任しているのが悪いのだから、一緒に彼らを治そうと言ってきました。私が性的指向を治療することはできないと言うと、彼女は強く反発しました。(中略) それでは何も言うこともないわ、治す方法が見つかったら教えてと言うと、彼女は無口になりました。(中略) しばらく様子を見

て、私は彼女に簡単な資料を送りました。彼女の息子さんが書いたカミングアウトの手紙も一緒に送りました。翌日にもいろいろ送りました。3日目の時、彼女から資料を読んでやっとわかったと連絡がきました。親が集まるチャットグループに入りますかと尋ねると、快く答えてくれたのです。

この場合、カミングアウトを体験する親子の間では対立が激しくなり、コミュニケーションがとれなくなっていた。性的指向を治療すると親が発言した場面では、ボランティアはフォローせず、むしろやや強硬な態度で接した。しかし、仲介者として親子の間に入ることで、結果的にはカミングアウトをめぐる親子間の問題を解決するコーディネーター的役割を担っている。

オフライン支援の場合、ボランティアは実際に家族の生活の場に入り、支援を行うこともある。例えば、Eさんの場合、同僚の男性同性愛者のカミングアウトをサポートし、その後、彼の要望により、何度も彼の家族と面会した。

Eさん：私が彼の家に行ったのは、彼がカミングアウトして3ヶ月が経った頃です。（中略）私は彼が今までどれだけ苦しんでいたのかをよく知っているため、それを彼の親に伝えました。彼はどれだけ親を愛しているか、今までの苦勞を全部言いました。息子としては親になかなか伝えきれない場合もありますが、逆に私は外部の人間として全てを伝えることができます。（中略）私は自分の経験も話しました。一方的に話すのは良くないと思い、何度も大丈夫かと確認しました。彼の両親はずっと集中して私の話を聞いていました。とても面白いのは、親は、話を聞くのは大丈夫だけれど、資料を読むことは拒否するようなのです。やはり同性愛者という言葉を目にしたくないのでしょうか。ですので、私は場合によって言い方を変えたりしました。

また、北京で活動するCさんもオンラインで相談を受け、自費で相談者の親が住む中国東北地方に行き、支援を提供したことがある。

Cさん：私は現地の活動チームを紹介し、オフラインイベントに参加するよう案内しましたが、参加者が多いため、その両親は現場で強く拒否したようです。息子は私たちから悪い影響を受けたと一点張りでした。（中略）私はこの夫妻と3回もオンラインで話していましたが、やはり現地に行った方が安心だと思ったので、現地に行きました。そこで同性愛者や私自身の状況について親の質問に答え、子どもの立場から彼らの子どもはいかに苦しんでいたのかをいろいろ話しました。（中略）その家族は現在もまだ完全には和解できていませんが、以前のような完全にコミュニケーションが断たれた状況からは改善されています。

このような周りに同じ経験を持つ人のいない家族、あるいは公の場に姿を現すことに消極的な家族に対し、出張型で支援を提供している。ボランティアは家族にサポートを提供するとき、用いる言葉に配慮し、伝え方に注意を払っている。また、それぞれの立場性と経験を活かし、支援を行っている。

(b) カミングアウトする本人への援助 (n = 3)

上記では、子どものカミングアウトで悩む親へのサポートを紹介したが、ここで、カミングアウトする本人へのサポートを紹介する。

ホットラインの場合、セクシャルマイノリティの質問の多くはどのようにカミングアウトすれば良いか、または自身の恋愛についての相談が多い。この場合 E さんは次のように対応する。

E さん：まずはしっかり共感してあげます。そして、カミングアウトは決して悪いことじゃないこと、カミングアウトは誰かを幸せにするだけでなく、家族みんなを幸せにすること、辛い道かもしれないけれど、しっかり打ち明けて、親の受け入れをサポートしてあげたらきっと良い未来につながることを伝えます。

この対応から確認できることは3点ある。1点目は共感すること、2点目は肯定的な態度でカミングアウトを捉えること、そして3点目はカミングアウトを単なる一方向的な打ち明けとせず、その後の親へのフォローの重要性を強調することである。また、親へのカミングアウトについて相談する子どもに対し、ボランティアは基本的にはカミングアウトすることを勧めている。

F さん：彼らに自分の気持ちを固めさせ、妥協しない態度をもたせることが重要で、親が泣くのを見て動揺してしまうと、せっかく踏み出した一歩が台無しになると強調します。また自分の今までの体験や気持ちを強調し、親に全てを吐き出すテクニックをアドバイスします。

G さんの場合、F さんと同じスタンスで、具体的なカミングアウト方法を助言している。

G さん：私は手紙を書くことを薦めています。一から教えるのは難しいのですが、おおよその構成を教えます。(中略) お母さんの前では手紙を開けず、家に残すよう助言すると、そのように実行してくれました。お母さんと話す時、同性愛者についてあれやこれやの知識ばかりを言うのではなく、もっと自分の心境、大変さや苦しさやお母さんへの愛を表現するとよいと助言します。

この場合、ボランティアは親の視点から、子どものカミングアウトを家族が受け入れやすい方法を相談者に伝え、共に適切な方法を考える。本来、異性愛者である親と同性愛者である子はカミングアウトにおいて対立する立場にいるが、支援者と被支援者の立場において、親と子である立場の者が協力的な関係性のなかに存在している。上記のように、支援を提供する際、ボランティアはカミングアウトを擁護するスタンスで、必要に応じて親子の間に入り込み、親子のそれぞれに支援を展開している。被支援者の話に共感して傾聴し、理解者がいることを認識させている。

(3) 支援の課題

本節では、調査を通じて確認できた現段階における支援の課題について紹介する。

(a) 政策上の制約 (n = 3)

現在、中国において政策上の制約があり、運営に支障をきたしている。これに関して、ボランティアはこのように語っていた。

*D さん*: 現在では、同性愛者の NPO 法人は登録することができない状況です。ある基金会のもとで個人事業者として登録されています。

*E さん*: 政府からの支持がないのが、一番惨めなところですね、私たちにとって。

*C さん*: 国から補助金をもらっていません。活動経費は主にボランティア、あるいはコミュニティ中からの寄付だったり、セクシャルマイノリティにフレンドリーな企業からの寄付だったりです。それと私たちがチャリティーバザーを行ったりして、お金を集めています。

このように、国から支援がなされていないことについて、ボランティアは不満を述べている。国からの支援がないため、ボランティアが支援活動を行いながら、活動経費の確保にも力を注いでいる。

(b) 地域間の支援の格差 (n = 2)

前述したように、Trueself は中国の多くの都市に支援チームをもつが、それぞれの都市において支援に格差が見られる。

*E さん*: 新疆ウイグル自治区では、強い民族の文化の影響を受けていますよね。

*A さん*: 私たちはカミングアウトすることを勧めていますけど、新疆ウイグル自治区とチベットのセクシャルマイノリティに対してはあまり勧めないですね。向こうの宗教の力があまりにも強く、セクシャルマイノリティだけではなかなか対抗しきれないですね。(中略) あとは四川省を例としてあげると、チベットよりの西側の方は同じ四川省であっても、あまり成都にイベント参加しにこないですね。まるで二つの違う世界のような感じです。

このように、地域または民族文化は当該地域の支援に影響を与え、地域間の支援に格差が見られる。

#### IV. 考察

前章では、Trueself の支援内容について述べてきた。ここでは Trueself によるカミングアウト支援が発展した要因と支援や社会状況における課題について考察する。

まず、Trueself によるカミングアウト支援が発展した要因について、3つの観点から論じる。

1つ目が支援ニーズの高さである。中国におけるカミングアウト支援は民間主導で行われ、そのなかでも Trueself は活発に支援活動を行ってきた。Trueself は全国に 70 以上の支援チームを有し、2018 年には、ボランティアの登録者数は 5000 人を超えた。また、全国規模の懇談会の参加者数は毎回 1000 人近くに上り、地域規模のシェアリング会の参加者数も毎回 200 人近くに達した。加えてライブ配信では、1 万人近くの視聴と 10 数万回のアーカイブ視聴がされている。これらの数字ははず

れも支援の規模の大きさを示すと同時に、支援のニーズの高さも改めて示している。

2つ目に支援の切り口の特異性である。Trueselfのカミングアウト支援は家族を中心に展開し、家庭内でのカミングアウトの受け入れと親子関係の改善を目指すものであった。周（1997）は中華系同性愛者が最も抑圧を感じているのは家族であると指摘している。また、Chou（2001）は孝文化の影響で、自身がセクシャルマイノリティであることが、親を苦しめることへの自責の念が強くなる傾向があると指摘している。林（2014）は、孝文化は中国伝統文化の根幹であり、孝は孝意識、孝観念と孝行為によって構成され、家庭では下の世代の者が年長者との関係を扱う時に持つべき道德の質と遵守しなければならない行為規範である。その内容の基本は親を尊重し、大切にすることである。つまり、このような文化で育てられた中国人セクシャルマイノリティは、自身のカミングアウトが親に大きな衝撃を与え、その苦痛や絶望から回避するため、カミングアウトしないことを選択している。庾（2010）は、男性が成人すると結婚するべき、子どもが多ければ福がある、子どもを産まないことは不幸の1つであるという儒教の影響から、男性同性愛者がカミングアウトを回避する傾向について論じている。このような文化的な抑圧が存在していることが、セクシャルマイノリティが家族へのカミングアウトに抵抗を感じている大きな要因となっていると考えられる。このような中国社会の文化的背景において、家族は極めて重要な存在単位である。Trueselfの支援は家族に焦点を当てたもので、セクシャルマイノリティ及びその親に対し、個別支援のほか、知識付与や他機関との連携などを通じてカミングアウト支援を展開し、家族内受容の可能性を大きくした。

3つ目が支援の多様性である。支援にあたり、充実した研修制度を整え、多様なイベントが取り組まれている。オンライン支援、オフライン支援を統合したハイブリット式支援は重要な役割を果たした。オンライン支援では、周囲に同じ経験を持つ人がいない、または周囲に支援機関がない家族、それと公の場に姿を現すことに対して抵抗感がある家族に対し提供され続けている。また、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、オフライン支援活動が制限される中、支援に新たな可能性をもたらした。オフライン支援はカミングアウトを経験する家族に新たな出会いを提供し、多くの自身と似た経験をした人々と出会うことによって不安を和らげ、仲間の存在を実感できる場を提供した。そして、こうしたハイブリット式支援を通じて、渦中にある家族に今までとは違う視点でカミングアウトという出来事を捉え直すきっかけをつくり、エンパワーメントした。このような支援は社会的支援が不足する中国社会において、セクシャルマイノリティ及びその家族の大きな助けになっていると考えられる。

しかし、いくつかの課題も現状として存在している。

中国では、セクシャルマイノリティの人数を統計上で把握することができていないが、Blued（2016）の調査報告によると、同性愛者だけでも7000万人存在すると推定されている。彼/彼女らの背後にそれぞれの家族が存在しているため、カミングアウトに関わる人々の数はさらに多く、無視できない存在ではあるが、公的な支援や権利保護政策などが形成されておらず、彼/彼女らを取り巻く環境の改善は大きな課題になっている。そのような社会的資源が乏しい状況で、Trueselfはカミングアウトという問題に立ち向かい、当事者同士で支援の可能性を探り、支援の空白を埋めているのが現状である。

また、その支援もかなり属人的なものに大きく依存している現状がある。被支援者のニーズに合わせ、金銭的な利益を得られない中、出張型支援を提供するボランティアの熱意が支援活動を支えている。述べたように、現在のカミングアウト支援は政府側が主導する活動が欠如し、民間主導と

なっているが、Trueselfは14年目を迎える今日でも、公益団体として認定されず、ある基金会のもとで個人事業者として登録されている。Trueselfのみならず、中国において現在、ほとんどのセクシャルマイノリティ支援団体の公益団体の登録が許可されていない現状がある。政府から政策面での支持だけではなく、活動経費の補助も行われていないため、支援団体は自ら募金を呼びかけざるを得ない。また、支援を遂行する際、ボランティアは自費で活動することも少なくない。支援を持続的なものにしていくためには、公的な支援や活動資金の提供が欠かせないものとなり、それらが存在しないことも課題の1つとして考えられる。

さらに、支援の物理的な提供範囲にも限界があることが明らかになった。インタビューでは、特にチベット自治区、新疆ウイグル自治区において、地域文化の影響により、支援が非常に難航していることを確認できた。この2つの地域は、中国の他の都市と比べ、宗教上の制限が多く、経済の発展も遅れている。加えて、Trueselfは全国70以上の都市でチームを有しているものの、地域の主要都市に活動拠点を置く場合が多く、小都市や農村などでの活動には制約があり、支援が届けられていない。オンライン支援が一定の役割を果たしているが、結果的にはオフラインに切り替えることができず、地域間で支援の質の格差が見られる。さらに、オンライン支援の場合、端末の有無やITツールへのリテラシーも支援に影響を与えている。こういった政策面の支持、宗教上の制限並びに小都市や農村部などでの支援環境の改善は今後の中国においてカミングアウト支援を展開する際の大きな課題だと考えられる。

## V. おわりに

本研究を通じて、中国におけるカミングアウトの現状とその支援について概観することを試みた。調査を通じて、社会的資源の乏しさを感じたと同時に、限られた社会資源の中で熱心に活動する当事者たちの力を感じた。支援機関 Trueself の活動は中国社会において、セクシャルマイノリティ及びその家族にとって、カミングアウトをめぐる家族内で生起する諸問題を解決する手がかりとなっている。しかし、本稿では、ボランティアへのオンラインインタビュー調査だけであり、新型コロナウイルス感染症が流行しているため、フィールドワーク調査が実現できなかった。そのため、現地イベントに対する描写が不十分だと考えられる。また、全国では70以上の都市に支援チームがある中、本研究は一部のチームの地域活動しか扱うことができなかった。多様な支援方式があるにもかかわらず、代表的な事例のみの紹介にとどまった。今後、以上の2点を踏まえ、調査を継続的に進めていくことが必要である。最後に、調査の対象者及び支援機関 Trueself の皆さまに感謝の意を表したい。

### 参考文献（アルファベット順）

- 北京同志中心 (2015) 「【LGBT 地図】 中国 LGBT 社会组织不完全名录及地域分布」『北京同志中心』.
- Blued (2016) 「2015Blued 大数据白皮书 THE BIG DATE FROM BLUED」『Blued』.
- Boyatzis, R.E. 1998. *Transforming Qualitative Information: Thematic Analysis and Code Development*. Sage Publications.
- Broad, K.L. 2011. "Coming Out for Parents, Families and Friends of Lesbians and Gays: From Support Group Grieving to Love Advocacy," *Sexualities*, 14 (4), pp. 399-415.
- Chou, Wah-Shan. 2001. "Homosexuality and the Cultural Politics of *Tongzhi* in Chinese Societies," *Journal of Homosexuality*, 40 (3-4), pp. 27-46.

- 河南商报 (2016) 「他被精神病医院强制治疗 19 天理由是：性偏好障碍」 [https://newspaper.dahe.cn/hnsb/html/2016-06/15/content\\_41104.htm](https://newspaper.dahe.cn/hnsb/html/2016-06/15/content_41104.htm) (2021 年 10 月 3 日閲覧).
- 黄云志 (2019) 「“同志出柜”的家庭接纳研究：以华南地区 F 市为例」『广西师范大学』硕士学位论文.
- 景军・王晨阳・张玉萍 (2014) 「同性恋出柜与家本位的纠结」『青年研究』2014 年 5 月号, 79-86 頁.
- 林明 (2014) 「中国伝統法における『孝』文化要素の研究」『島大法學』57 (3/4), 19-32 頁.
- 森永貴彦 (2018) 『LGBT を知る』日本経済新聞出版社.
- 三部倫子 (2014) 『カムアウトする親子：同性愛と家族の社会学』御茶の水書房.
- 生活报 (2018) 「教师因同性恋身份被开除：我教导孩子要诚实，无法说谎」 <https://baijiahao.baidu.com/s?id=1612997488382185038&wfr=spider&for=pc> (2021 年 10 月 1 日閲覧).
- 砂川秀樹 (2018) 『カミングアウト』朝日新聞出版.
- 田中みどり・今城周造 (2021) 「性的マイノリティの自己受容とカミングアウトの関連性の検討」『昭和女子大学生活心理研究所紀要』23 卷, 59-74 頁.
- 土屋雅子 (2016) 『テーマティック・アナリシス法：インタビューデータ分析のためのコーディングの基礎』ナカニシヤ出版.
- 王晴锋 (2011) 「认同而不出柜：同性恋者生存现状的调查研究」『中国农业大学学报（社会科学版）』第 28 卷第 4 期 (2011 年 12 月), 142-153 頁.
- 王晴锋 (2014) 「“家庭出柜”：影响因素及其文化阐释」『广东社会科学』2014 年第 3 期, 189-197 頁.
- Wei, Chongzheng and Wenli Liu. 2019. “Coming Out in Mainland China: A National Survey of LGBTQ Students,” *Journal of LGBT Youth*, 16 (2), pp. 192-219.
- 庾泳 (2010) 「长沙市区男同性恋人群生存状况研究」『中南大学』博士学位论文.
- 中華新聞傳媒網 (2017) 「《网络视听节目内容审核通则》发布」[http://www.xinhuanet.com/zg/jx/2017-07/01/c\\_136409024.htm](http://www.xinhuanet.com/zg/jx/2017-07/01/c_136409024.htm) (2021 年 10 月 3 日閲覧).
- 周華山 (1997) 『後殖民同志』香港同志研究社.